

感性を育む和学講座第27回

～「茶」の歴史とやまと言葉と古事記の世界観1～

新茶の季節です。

今回は「お茶の歴史」についてお話いたします。

お茶は、大きく分けると、茶葉を酵素反応（発酵）を行わせた**紅茶**と行わせない**緑茶**に分かれます。



発酵が進むにつれ、葉緑素も酸化していくので、色が**緑から暗く**なっていきます。

お茶の原産地については、中国の四川・雲南説と中国東部から東南部にかけての地と、二説あります。

中国での喫茶の風習がいつから始まったかは定かではありませんが、古くからあったのではないかと考えられます。

中国は土があまり良くなく、**水も生で飲むには適さない**ので、沸かして飲んでいたのが、やがて薬草などを入れて飲むようになり、お茶ができたと思われま

茶の文化が中国で体系化されたのは、唐の陸羽（?-804年）でした。

お茶の飲み方としては、くず茶の**柶茶**（そちや）、茶葉の散茶、茶葉を圧縮して固めた**餅茶**（へいちや）、餅茶を挽いて粉にした**抹茶**があるとされています。



日本に伝わったのはいつかは定かではありませんが、天平元年(729 年)聖武天皇の時代に「宮中に僧を召して茶を賜った」と記録されています。805 年に帰国した最澄は嵯峨天皇に茶を点てて差し上げています。

806 年空海が唐より茶の種子を持ち帰り、弟子の堅恵大徳が宇陀市榛原の佛隆寺に播種され、その製法を伝えたのが「大和茶」の始まりと云われています。

遣唐使の廃止とともに唐風のしきたりが衰えていき、茶もすたれていったと思われていますが、漢詩などに茶を供したことが残されており、平安時代を通じて、京都の寺院を中心に茶を喫する伝統が継承されていたという説もあります。

お茶の再興は 1191 年栄西が宋から種子を持ち帰ってからです。

栄西は持ち帰った茶を九州の背振山(福岡県と佐賀県の境)に植えます。

また、宇治の明恵上人(鎌倉時代の僧)にも茶の種を送り、明恵上人は京都の栴尾・高山寺に植えます。やがて宇治にも植えられ、宇治茶の始まりです。

13 世紀半ば、嵯峨天皇が宇治の地を訪れてから、宇治でお茶の栽培が本格化します。

当初は戦場で、現在の何倍も濃い抹茶を飲んで眠気を覚ます薬のような飲み方をしていたのですが、やがて嗜好品として飲まれるようになっていきます。

南北朝時代には、栴尾のお茶が「本茶」とされ、それ以外の醍醐や宇治のお茶は「非茶」とされました。

室町時代にかけては、お茶の生産地を当てる賭け事「闘茶」が流行りました。

南北朝末期には足利義満の庇護を受けて、宇治茶は発展していきます。

戦国時代になると、織田信長が茶師の森彦右衛門を重用し宇治郷の支配を命じます。信長の死後、秀吉は茶師上林氏を積極登用し、秀吉の茶頭利休は、上林氏とともに宇治茶の地位向上に尽力しました。



江戸時代には、宇治から幕府に献上する「茶壺道中」が行われるほどに、宇治茶はブランドになりました。

日本三大茶は静岡茶、狭山茶、そして宇治茶となっています。

茶道

栄西が持ち帰った茶種の栽培が普及すると、公家や武家の間で喫茶は習慣化していきます。鎌倉時代末期には、中国の茶器「唐物」がもてはやされ、その茶器を使用する**盛大な茶会**が大名の間で流行りました。

室町時代になっても「御成りの茶」として大名たちは、客人をもてなす宴の間にお茶を供しています。

わび茶は村田珠光から武野紹鷗を経て、千利休が完成させたと云われています。ただし、「わび茶」という言葉は江戸時代になってからです。

千利休は多くの弟子を持ち、単なる茶人を超え、秀吉の側近にまで登りつめますが、最後は秀吉に切腹を命じられます。

千家はその後、継嗣の**小庵**と実子の**道安**に再興を許されて続いていきます。堺千家を担った千道安は断絶し、京千家は小庵から**宗旦**、そして三千家となり、今日まで続いています。

宗旦の三男が**表千家**、四男が**裏千家**、一時養子に出されていた二男が**武者小路千家**となり、千家を名乗るのは、この三千家のみとされています。

江戸時代は戦もなくなり、町人文化が花咲く時代でした。茶の湯も大名や武士だけでなく商人の間でも流行り、茶の湯人口は増えていきました。

明治維新が起こり、徳川政権が表舞台から姿を消すとともに、茶の湯は西欧文化に押され、それまでの芸能を軽視する風潮に茶の湯も飲み込まれるようになります。

三千家は連名で、「茶の湯」は遊芸でなく、「道」「**茶道**」であると著して口上書を提出しました。正式に「**茶道**」と主張したのはこの時が最初です。

三千家は女性にも「茶道」を教示し、女学校で授業を持つようになり、「茶道」は昭和時代になっても女性の教養の一つとして確立していました。

100歳を超える裏千家**大宗匠千玄室氏**は、特攻隊に志願しましたが、出撃はされませんでした。おそらく千家の跡継ぎということが影響を与えたのでしょう。その後、大宗匠は慰霊のために海外で献茶をされておられます。



利休七則（りきゅうしちそく）

1. 茶は服のよきように点て

その時、その場で客の気持ちを察し、よく考えて点てる

2. 炭は湯の沸くように置き

炭は湯が沸きやすいように置く→段取りや準備の重要性

3. 花は野にあるように生け

余計なものは省く

4. 夏は涼しく冬は暖かに

工夫をしてそれらを感じるように

5. 刻限は早めに

ゆとりを持つ

6. 降らずとも傘の用意

備えを怠らない

7. 相客にこころせよ

同じ空間、時間を共有する相手を気遣い、思いやる